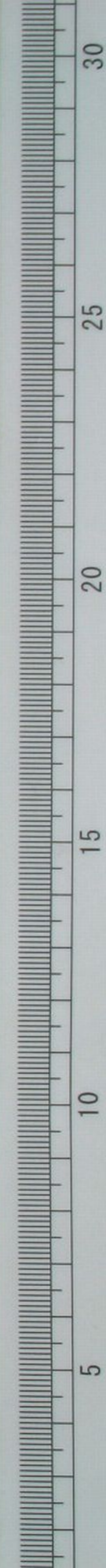


春堂獨語

四

21

特別
14
1919
104



に聞きたる(難)難(由)之の存(流)ありて(希)希(子)其(事)も
之(の)存(終)と(ま)あ(わ)の(ま)の(事)も(希)希(子)其(事)も
と(ま)あ(わ)と(ま)あ(わ)

(一) 順徳寺の遺蹟

信濃國高野寺の文書に、僧賢友の順徳院所請、修繕
に關する上書あり。一、高野寺に在りし

高野寺に在りし高野寺の遺蹟、高野寺の遺蹟を納
め、上高野寺の遺蹟、高野寺の遺蹟を納
し、高野寺の遺蹟、高野寺の遺蹟を納
め、上高野寺の遺蹟、高野寺の遺蹟を納
め、上高野寺の遺蹟、高野寺の遺蹟を納

東林院

乍恐謹言上

一 佐州雜太郎醫王山國分寺門徒、同郡真野山眞
輪寺ハ仁□十二代村上天皇御宇、天曆年中
之御草創、本尊者阿彌陀如來、別當并衆僧十二
坊ヲ被_レ居置、天下御安全毎日之入堂勤行無_レ
懈怠、殊勝成靈場ニ而御座候御事、
一人王八十四代ノ帝順徳院、承久□亂之時、當
國ニ被_レ成遷幸、真野山ニ御在居、二十四年之
春秋ヲ送給、終於彌陀堂仁治三年九月十三
日成テ崩御、即奉_レ葬真輪寺境内、築_レ陵建_レ
石牌、纔ニ御法事有_レ之由致_レ傳承候、其御舊
跡于_レ今相殘申候御事、
一 順徳院御在命之御時、被_レ宛行候供御料者、崩
御之後雖_レ被_レ召上候、從_レ古傳來之眞輪寺領
知、并彼御廟之近邊山林田野別當衆徒依持傳
申靈廟之勤行不_レ怠相_レ勤之、經_レ年序候之處、
百餘年以前當國所々之地頭等起_レ兵亂、至_レ此
時_レ寺領之地、御墓之塚内、悉被_レ掠_レ取之、御廟
之近所少々雖_レ相殘候、或民屋ト並_レ境、或爲_レ
農業ニ猥放_レ入牛馬、奉_レ穢_レ御廟所_レ事、誠以無_レ

勿體次第、絶_レ言語候、因_レ茲別當坊中雖_レ及_レ
微_レ候、勵志尊慕退轉不_レ仕候様ニト奉_レ存、御
衰廟願之廻_レ漸方三間結_レ竹笹且夕致_レ掃除、
御命日之勤行等、無_レ怠慢_レ修行仕候、併從_レ
公儀_レ御制禁依_レ無_レ之、士民之族僧坊之警固
ヲ不_レ用申_レ候、如_レ只今_レ於_レ御座候者、追日敗
壞可_レ仕御事、乍恐奉_レ悲_レ之、遂_レ言上_レ候、伏
而願者此等之趣被_レ聞召上、彼靈廟之近隣除_レ
汚穢、
天子之御威光輝_レ國家、諸人奉_レ成_レ尊敬之思_レ候
様ニ、御歸依之御下知奉_レ仰候、仍言上如_レ件、
本寺
延寶六年九月十八日 國分寺

門徒 賢教
眞輪寺 賢照
御奉行所

菅原氏の政略と室町御所の築造と
ときくはつて賢政の上書嘉納のころと
おとよとてを得ず

菅原氏の上方をうごも菅原の棟納を
信守より菅原五郎久成とて（徳川
實記の坐家とあるを誤ると云ふ）此
以後元年代にても菅原の跡承るも
寛文十一年庚戌二月廿日御所
行を御余せしと云ふ

菅原

菅原氏の御所を築くに方五十間の
とてしめ御所の修造をせしめ
御所の御所を築くに方五十間の
とてしめ御所の修造をせしめ

御所へ差出せし書面を以て

光

高八斗七升九合七勺 休州藤太郎竹田村之内

内 七斗五升九合七勺 本途

三斗四升 信長地子

右高八斗七升九合七勺に辰丸岡先堀五十四間

右順徳院御廟八ヶ敷に在り附
後南末自、物本直之を引渡す

及以上

延寶七年未九月 菅原五郎共備

御勘定所

表考之通依州難太郡竹向切之白文斗七升
九合七勺之石、經多年物成其歸奇之可也
海多、断内本文之有之也

喜右衛門 ○甲斐守

五兵衛 ○徳山

内藏允 ○杉浦正照

備中 ○岡印波守勝
主初名、歎曰上

能登 ○土井
初名、志中

加賀 ○天久保朝
曰上

美濃 ○宿屋正則
曰上

圓合寺更々之聖年在以此書上考し之也此也

此也神所法上之也

一依州圓合寺并門徒真輪寺

順徳院皇御廟不之儀神所法上之也所之被

達上聞、方五十四間之所之集云之間、天子之幽徳

此以之ある也、末代之竜鏡籠花云之也及也

者圓合寺と始門徒十三個寺、並御廟也不

之る姓之人云四十名院之御公納之御役仕也

三拜御廟不之勤行掃除等雜成也、右之石

役御赦免被成と云、友者、偏天子之御恩、深也

在、後葉之つ以く勤行多懈怠、掃除等、以

さて御朝退轉不仕格とて有るは、御座るは、此所
前所をより常根五郎兵衛殿、申上候得者、即
御合點らば、申上候御座、御座候と云、可仕仰
与御座候と申上候は、今も仕立の御役御座
ら御仕立候。此上者も御仕立候申上候御座
被申候。幸甚御座候に、此所をより、此所御座
候と云、右之趣被申上候。末代之事、御座候
間、御座候と仰候以上

延寶八年庚申五月十日

圓分寺判

御奉行所

御座候由之御座候と云、申上候。此所をより、此所御座候
間、御座候と仰候以上

此所の御座候は、御座候と云、申上候。此所をより、此所御座候
間、御座候と仰候以上

賢友

表右院御代中山御目見の元祖御座候

延寶八戌申二月十日寺御座候無仕不

見献上十帖一巻位親生家不知
と記する事さう甚しむ所なほ深し

◎順徳帝御子御産成王に因りて又書

作はる。順徳帝の御子一宮二宮三宮の三王子ありて
の遺跡ある事さうしきあるを傳唱す、而して順徳
帝の御子御産成王とて帝の跡を承りて佐治く
御らん其産成王の地ありとさうを末にゆゑさう
しして此の本所正徳寺とて御の唱道とせん
と中々内書にも見えぬ。その事さう御の唱道とせん
情に敬す事さう念上人御産成王に因りて又書



しして其の遺跡を尋ねし事さう佐治西三河村法
名院家、さう上人寂せん事さう真言宗を御中伏木
へ移し、こゝに勝興寺を造りて佐治に於ける遺
跡の事さう正徳寺とて承りてさうさうありと
ありし事さう佐治の村に於ては官史を流しとす謂ふに
候を檢令てしめ且つ伏木勝興寺を御に勝興寺と
正徳寺とせん事さう本山本願寺とて文部監念ふに
ひし事さう正徳寺ありと事さうと御節を念ふ事さう
事さうを以て、こゝに漸やく産成王の事蹟を確うし
ありとせん事さう有る事さう之れを關係する文書を掲げ、傳
の考ふる事さう資せん事さう

信濃國羽衣郡小本町正覚寺縁起

抑も昔生山正覚寺の本名を殊勝極と云照行寺と
云ふしを云ふ人多し十四代明徳天皇の御新詔
より信守を御開山聖人の御弟子位座上人の雅太郎竹
田村に遷すに給ふ事後帝の御子位念法親王
に云ふ子京都より御下向すし御父の後墓
を御田向の北寺に位しある此處も同聖人の御
才ありしと善室房上人よりしきりての御
位持へ上人の御子孫をまじしけり後上人思ふ
ありし深山にわけ入る十八枚坪止む事ある一字
を遷すし御勅宣の寺縁并御開山聖人の御才

東
山
寺
縁
起

御本寺の十人の名縁其の御宗物を納めしむる干時
御開山より身八世蓮如上人の院門徒二百五十人の
輩其の御先よりし御宗物を蓮如聖人の御許
へ送るし先とせし寺のありし御開山聖人の御本寺
と云ふ處房の寺しむる十字御名縁并同聖人
らに御寺の再山善室房位座上人の御いしる事縁
錦の御かゝる御ありし後文和三年の院本問答馬寺
所をより有才二世行良上人の深く御縁し其の縁を

以下次頁切り抜へつゝ

羽茂知須川の里に移し、大伽藍を建立し正覺寺と改む、又十八枚竹田の御堂は前住の隱居所、又弟子をつかはす、其頃は竹田五十里、四三川、澤崎、羽茂知の村々に門徒多かりける、後天正十七年越後の上杉勢が佐渡國へ押寄せ、處々を攻落して、羽茂地殿も行方知れずなりければ、家臣の面々にて歸依のかた／＼と、此小木村と云ふ所に移り、一字を建立し、御本尊を安置し奉る、此地は無雙の報土なれば、後々の住僧たらん輩は、一念に回向して、佛恩報謝に怠慢あるべからざるものなり、承應二癸己歲二月廿七日夜、釋靈尊、

菅生山正覺寺、御代々御忌日、釋願正書寫ス
正全房釋信上人、寛元二年三月十七日、藤原光範の男、某は竹田村ナツワタリにあり、
善空房釋信上人、弘安九年三月二十二日、眞野御房の御子にて、御開山聖人の御弟子、母は藤原兼光の娘なり
善正房釋信上人、徳治二年七月十九日、信念上人の御子にて、母は遠藤三郎盛世の娘なり
正行房釋信上人、元亨二年四月二十一日、信興上人の弟、善住房釋信上人、正和四年七月二十七日、了信上人の子、善行房釋信上人、嘉暦元年十一月二十九日、了信上人の子、正岸房釋信上人、延文四年九月八日、了信上人の御子、正覺房釋信上人、應安元年正月十四日、祐念上人の子、母は金子佐五兵衛娘、
釋信貞尼、嘉慶二年十月二十七日、本間對馬守高長(下界)の女後羽茂々澤に一字を建つ、

○寄附證
善空房信念上人墓地、反別三畝十五歩
右金山笹川組、字法名院塚、往昔者親王御陵と唱ひ、勝興寺元祖の舊地と傳へ來、舊に依り今般勝興寺(寄附仕候也) 明治廿七年三月 佐渡國羽茂郡小布勢村、四三川 金山笹川組惣代、九名 連署
○
越中國勝興寺御住職土山澤映殿
新潟縣佐渡國、三浦有志、金子勘五郎等語て上言す、伏て惟みれば、我四三川村字法名院塚と稱する墳墓は、越中國射水郡古國府眞宗勝興寺開、與信念上人の遺骸を埋葬せし所にして、上人は承久帝第三皇子彦成王光顯女或云兼光の娘なり、同寺山緒等に依り明かなり、王は承久元年二月十五日御降誕、御年三歳の時、父帝の我土に御遷幸の事ありしを以て、世々惜みなくや思し給ひけん、嘉祿元年御年七歳にして、叡山座主大僧正慈圓に請ひ徒弟となり、齋教を修めさせ給ひ、御名を成尊と稱し、佐渡宮と號し奉る、其秋慈圓寂せしを以て、東國に往き本願寺開基僧善信(見眞)に請ふて其徒弟となり、其教職を修め給ひ、善空房信念と改稱し奉る、王は叡山に在せし日より、常に父帝の遺島に遷らせ給ふとを慨歎し給ひしが、師善信にも曾て父帝本土に遷幸の途次、教法の事に付親しく勸問を賜はり、其後弟子信應を佐渡に遣し、宗門の一道を榮上し奉りしかば、帝之か爲めに本州竹田村字御堂坂に一字を建立なさせしめ、侍者地蔵人が彫刻せし阿彌陀佛を安置し、且つ御靈廟を造らせ給ひ、殊

勝興寺行寺の誠を賜ひぬ、是の因縁あるを以て、帝の否塞を嘆息し師弟の情誼殊に深厚なりしが、後仁治三年九月十二日、帝崩御まし／＼しと聞かせ給ひ、信念師弟痛泣悲嘆の餘り、父帝在世の時に及んで一たび恩顧を拜せんことを期せしも、今や如何とすへからず、此上は崩御の地に就き冥福を祈り奉るこそ、又阿極に報ゆるの一端なれとて、遂に本土に渡らせ給ひ、竹田村興行寺に止まらせ給ふ、時に御年廿七歳なりと云ふ、然るに當時北條氏專制の時世なれば、其命令を受けて國政を執る本間氏等、上人の容儀尋常の僧徒にあらざるを以て、疑心を措くやに聞ければ、御心安からずや思召しけん、竹田村より羽茂郷へ通する沿道にして、金山笹川村は山溪の間にありて、幽寂の地なることを聞かせ給ひ、茲に寺基を此地に移し、専ら教行を修し、父帝の冥福を吊らせ給ふ、時に弘安九年三月二十二日、御年六十七歳にして薨じ給ひ、又是に於て御子信興上人等之を此土に埋葬し奉りき、即ち法名院塚是なり、後數世にして寺號并に寶器等は越中國へ移し、勝興寺と稱し、遺跡に正覺寺なるものを置きぬ、然らば則法名院塚なる者は、正しく王の墳墓にして、今皇胤紹運運録大日本史諸書に、王の生没年月も知ることを能はざるは、早く佛門に歸し少壯にして海島に入らせ給ふを以てならんか、勸五郎等祖先より其意下に住居し、常に心に皇胤の斯る山間僻遠の地に埋没して顯はれず、歲時享祀の典細かさること悲嘆するも、愚蒙にして上聞する所を知らず、今や朝廷追遠之典に御心を注かせ給ひ、翳亮の言猶ほ採擇を賜ふの時に當り、隱忍して言はずんば、忠實と謂ふべからず、

是を以て勝興寺由緒書、正覺寺過去帳等を輯録し以て此に上言す、伏て願くは故實に明らかなる者を發し、實地を踏査せしめ給はば、其石墳古苑墓木老朽等に依て證憑するに足るものあらん、嗚呼六百有餘年間草萊に埋没して、幽光の將に已滅せんとするの遺跡をして、輝灼を再發せしめんこと、勸五郎等悃請の至に堪へず、誠恐誠謹聞す、
明治廿七年十月二十日 (九十八名署す)
宮内大臣子爵土方久元殿
彦成王の御墓所發見の趣を以て、出願に係る要領及小官か實地踏査を爲したる際の所感を記し、參考の便に供す(新潟縣屬官井上堯の復命書)
順德院天皇第三皇子彦成王は、承久元年に降誕ましまし、幼にして佛門に入り、初め叡山に入らせ給ひし處、仁治三年九月、父帝の崩御まし／＼たる事聞こし召し、痛泣悲嘆の余り遂に佐渡に渡り給ひ、善信の弟子信應の建立せし、舊雜太郎竹田村興行寺に止まらせ給ひし處、上人の容儀尋常の僧徒にあらざるを以て北條氏の搜索に迫ることを聞こし召され、其疑を避けん爲め窮海の深山幽寂の地たる、小布勢村大字四三川字金山笹川十八枚に寺籍を移し、勉めて衆庶と交通を絶ち、専ら教行を修し、父帝の冥福を吊らせ給ふと云ふ、是より數世の後右興行寺の寺籍を越中國射水郡伏木町字古國府へ移し、興行寺を改め勝興寺と號し、興行寺の遺跡へは正覺坊なる者を置き、墳墓の監守を委したる由なりしも、時世の變遷と共に轉々し、何等



羽茂知須川の里に移し、大伽藍を建立し正覺寺と改む、又十八枚竹田の御堂は前住の隱居所、又弟子をつかはす、其頃は竹田五十里、四三川、澤崎、羽茂知の村々に門徒多かりける、後天正七年七月廿七日上杉勢が佐渡國へ押寄せ、處々を攻落して、羽茂の頃にか正覺寺と號し、寺院の列に加はり、其寺は今舊羽茂郡小水町に存せり、右興行寺の跡十八枚寺屋敷の後方に、小高き山あり、其山頂に大小の古墳三個あり、此塚を總稱して法名院塚と云ふ、此塚の大なるものは中央に築き、小の塚は大塚の左方に寄りたる前方にあり、塚の上には何れも一樹を植込、塚標と爲したるもの如し、其大なる塚は、右は櫻左は松、右二樹は共に大樹となり、日通八尺餘に及ぶ、年を経ること七百年以上なりしならんと云ふ、故に何れも幹を倒し其幹倒したるものは、悉く塚の後方に横たはり、新たに樹根より芽を生じ、松櫻共に既に尺餘に及べり、右三塚の内一は善空坊信念の塚なりと云へり、此信念は弘安九年三月廿二日遷化すといふ、此信念と稱する僧こそ前述する處の彦成王の御法鉢と成らせ給ひし御名なりとは、出願人等が主張する處の第一要旨とす、右信念と稱する僧名が、皇子彦成王の御法鉢の御名なりや、且該塚に果して信念なる者を埋葬したるやは未だ取調の盡きざる處あるを以て、暫々に斷言し難き事なるも、古墳の現状に依りて考察するに、何んとなく威嚴其内に具はり、尋常人を埋葬したるものと目し難き處之れあり、古書に昔し佐渡より砂金を出す云々と云ふは、此西三川金山笹川十八枚の事にして、其最も盛なりしは徳川氏初方時代とす、故に古墳の附近は寸歩の地と雖とも、殘す處なく採掘し盡しあるも、獨り古墳の山頂には少しも手を容れたる形跡を見ず、且里人は彼の法名院塚は其何たるを解せざるも、墓土の樹木等を伐採せざるは勿論、轉倒したるものと雖とも、持去ることな爲さず、自然の朽敗に任し、又疾病災禍

○寄附證
善空房信念上人墓地、反別三畝十五歩
右金山笹川組、字法名院塚、往昔者親王御陵と唱ひ、勝興寺元祖の舊地と傳へ來、舊に附、舊に依り今般勝興寺へ寄附仕候也
に遭遇するときは、塚の附近に至り祈禱するを例とすと云ふ、徳川幕府の專制を主としたる、嚴制の時代に於ても、該山頂へは寸歩も手を下ださず、又里人其何の故たるを解せずと雖とも、唯尊きものとの觀念は、十分に保持し居るもの如し、彼れと是れとに徴して考察し見るに、當時制かに皇胤を納めたる塚なりしことを知る者ありて、傳説したるものにはあらざるやの感なしとせず、
○(富山縣明細帳抄出)
石川縣管下、越中國射水郡、新湊古國府字六伴、
眞宗本願寺派
勝興寺
阿彌陀如來

に移し再興、永祿二年本願寺別許の院家六ヶ寺あり、勝興寺其一に加ふ、顯榮第一子顯幸住職中、天正九年四月、兵火に罹り堂宇亦灰燼す、依之豐臣太閤より越中國主佐々成政へ命して、現今の地所を寄附せり、爾後天正九年六月より以て今日に至り、代々寺務相續す、
一堂宇間敷 前口二十四間、奥行二十四間
一庫裏間敷 前口二十五間三尺、奥行三十四間
一境内坪敷并地種 二千三百十一坪官有地第四種(下略)
明治十三年一月

其管下佐渡郡小布勢村、大字西三川、古墳之嶺、御陵墓傳説地として保存可致に付、該地として民有地反別九畝十六歩、道敷として全一畝廿七歩、合反別一反一畝十三歩此代金四拾參錢貳厘を以て買收候條、買收方取計、其筋より訓令次第地種租替之上、實測圖面を以て當省諸院寮へ引渡すべし、此旨相達す、
明治三十一年十二月六日 宮内大臣子爵田中光顯

○(四本願寺明細帳抄出)
承久辛巳年、順德帝佐渡國へ御左遷行在中、宗祖見眞大師北國行化の際、召して他力眞宗の法門を開給ひ、觀感の餘り同國に於て一守を創建し、勅して殊勝誓願興行寺とし、乃ち勸願所と爲す、略して勝興寺と稱す、其後同帝第三皇子彦成王宗祖大師の弟子となり、善空坊信念と號す、則勝興寺の住職とし、これ

を開基と定む、後ち信興、了信、々々、信源の時、于戈亂論の際、寺跡頗廢に向はんとす、文明三辛卯年、本山第八世蓮如宗主北國に下向し、越中國彌波郡登谷庄土山に於て一字を建立し、佐渡國勝興寺の寺基を移す、同宗主第三子蓮乘住職す、此時越中國四郡の寺院并門下を悉く勝興寺へ與力に附し、一國の餘所と定む、國法寺法共に関する、文明十一己亥年、同宗主第四子蓮誓を住職とす、明應三甲寅年同國同郡高木場村と稱す、寺基を移す、永正十六己卯年二月、兵火の爲め堂宇灰燼す、依て同郡安養寺村に寺基を移し再興す、永祿二己未年、本山院家六ヶ寺の一に加へらる、顯榮の子顯幸住職中、天正九辛巳年四月、兵火に罹り堂宇亦灰燼す、依之豐臣太閤より越中國主佐々成政へ命して、現今の地所に轉せしむ、
新 潟 縣

明治三十一年九月廿七日 伯壽 大谷光尊
諸院頭伯壽戸田氏共殿

諸院頭伯壽戸田氏共殿
伯壽 大谷光尊

以今一と非道とも加味し、拙めしするもの、此の道義
の重んずべきを説き、只及、廿歳、風俗の維持を力
ち、その心を、すまう、その心を、即ち是に
一と、拙者、石田勘平一と、その首唱、る、
石田勘平、を、長と、稱し、
國の、人、を、壯、時、は、く、を、南、家、の、求、め、
能、の、不、男、と、さ、う、し、こ、と、を、
の、確、證、を、言、を、用、ひ、
く、自、性、を、免、得、す、る、こ、と、を、
道、を、能、き、
お、の、母、房、馬、し、と、
石田勘平

一日、お、出、て、
と、
水、を、泳、ぎ、
う、物、を、
閑、し、
者、軒、を、
性、を、
平、を、
う、く、
套、
物、

如動して勸学と四十五年の京都車る可也と御地子
トそと講席を聞きとてハ代ハ津一の事候十
四年と云ふ事、中野の人末比心子の直言をいふ事
以て聴清ると其意をうしと勸学表然として又言
ず、忍耐持久、講読の熱心と或はさうく多衆を心
に抱致し、進み或は有名門人を出する事あり
うせり、とて忠告言尼其言、其言う事と
江念と云、千嶋坊属のこと、きと其言う事と
正、勸学の講読と都鄙問答又と齊家論と
し、刊行せんと、心子の開祖を以てする孫心
と石門のを以て終る、勸学六十歳とて及す

本
巻
終

勸学の玉鉢を継けるも千嶋坊属と云ふ、坊属、京
都の人名と信又喬房と呼び字をををぬす、
言まへり、智と申して深不と申して終る、
改、年次以下の秘恩燈何と隠居して道を弘
人呼んで京師と云ふ事、終る、明和元年二月
京西陣より清原を改けし、其年中、
終る、直氣社、此中、伏見、大津、
大和の法を世傳し、大い、社、
めを、坊属、
終る、
と云ふ、

更に物にひきまはしむれば自快し欣喜のの悦ばる事友に亦兼
 北山を尋ねて此の事を知りて北山に於て究むる事をして以
 て坊僧の煩を打てて坊僧また此の一打の下に疑心
 とて世間通する事ありて更なる事なきは物に於て
 此を知る事此の悦ばるの事とせしめし物に於て首肯し
 従は存存の工夫を以てする事とせしめし物に於て
 此を知る事悦ばる事とせしめし物に於て何れも坊僧商人
 に向つて勤侯を説き傳へ商人と其の秘訣を授けんと
 我う杖と系書を著しし。兒童を育りめめしと前訓
 の書ありて坊僧の商人申すも拙翁の言も著し
 坊僧のついでに中津通に起る事此の事也京都の事也

東洋傳説

電車久兵衛と云ひ蹴鞠を専業とせし。高寺の書
 元禄寺師の流し流しを以てし白門に入る事と
 其を以てし流し流しを以てし傳道のためは江
 戸を下りて来る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 厄草草流の流しを以てし其の市強を以てし
 一ことと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 けやうししと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 隆平の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 従はる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 特長と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

常也也輕の「天地之常其心、善為物而以心也」
後此して向々

道とは何ぞ者ぞナウく鳥ハカアく、或鳥ハ心その
道好き鳩の道(鳥)より其位高しして行外外に
いおぬをまゐい、其位の高しと勤めを居ると天地相合
の道といふ、柿の木と柿の出来ともあいつく、栗
の木に栗の出来ともあいつく、と口舌言はず、
此の道あり、和合の道、此の道あり、其れが
非道(それら皆道) 其れが非道(それら皆)
道又也

道といふを順應するは、そのまゝにして

人々一個のハ天地、天地のぬえ道はとも人ハ天を
心として形を土とや、一切天の化して土とや、
悉皆土の化、土とよむら、土と二つはとも、涕、
扱の土とやとを例、鹿の匂いもせず、奴の土とやと
と尻からげてもいぬ、平等一扱土、太陽とよ
い、西行も中もおおすもいぬ、土のはり
と、福多樹(きんぎょ)

又心の本体と後此して、獲る所の又人々あは
くぬ思ひ出を遠くあつす、晴の境、寝れぬ何う
者を釋かすれども、能くも解しぬ、犬も猫
七くうくばつ、十万人百万人もあつて

楊柳亭居士のまゝに始以實子の宮七世某も七職
 も七に在りてくらくは令卜するしや。寝比姿
 とおろえ凡神も。或は童子とも寝てをる。母
 もあつた乳母もあつた。外にほえても寝てをる
 何れも何れ神のえりて清えてる。あし七師
 かくはまの。天地合相合性也。さうし、
 件、此の如る礼、衆生未成佛までことを能く
 考へて神らうとす。まはりてのまき神案トヤ
 三二

一之遊を圓く令てし。は道二と勤侯節約を設
 けてたのち、
 行ふたのち、
 戒

人まき人の中も人まき人まき人まき人
 君のたもて行く人、
 かくは行く人、
 い。其又かけあつたも、
 ち。其先が一書子錦鏡、
 くの何つらうしや。其上美しいとふら、
 高き也。かくもあつた。

ビシクグラシクトシクと妬うも二谷あや羅か
一丁足女と情の秋わいしくのわいと一向かくとい
一丁足女とわいあむいねむ聞しぬ、そこぢお忠あ存
身投げん中、若く、ととぬく直打の意いけ
あてころうましくと後を行くぬれをまじけ
ぬいひりぬのけき道とこのところ
其の辨舌の自在権換~~は~~もる、持らぬ女は道二
まね二年七十人をして殺す其子道轉、亦も流る巧
みしと父と娘とを、こしとま
道二と同ゆるし主部と布施松尾ととも五巧ぬの辨舌と
ゆつと晴の道二、若くし、堪度の子上河正楊師家

こうと重きと指し、高牙鍾田柳沢師徒を祖本に
し、みと白、肥後義堂昔の幼者のあはす、
を著つたあ、又、其子道二の、
流の人出言分和助異志の道徳家とせ和助
其義徳と移せん、然ん、心その舟の傳人とし
ち、せんし、ち、母代の起すの伝へ
媽あをえを尊とい、い、を、あ、と、い、お、禁、の、ら、其、い、ま、
印、し、と、受、取、心、ま、甲、中、下、有、能、堪、徳、あ、ま、い、は、終、ま
性理の蘆奥を、あ、ま、ま、及、こ、い、伝、あ、中、年、終、を、失、し、益
々、幼、子、あ、い、思、を、あ、ま、ま、一、ね、後、あ、ま、ま、日、さ、り、く、修、徳、体
の、清、く、な、り、い、を、上、流、社、會、ま、も、い、ま、ま、あ、り、と、ま、あ、あ、好、め

其の武修を以て清法を革新せしめしものありしが
為道流と稱し其の行も、あつたはるゝを空家といひ
辨後、めをいしや左の一ツ節と後、其の
一
瓶を夜ふきとせん

(前畧) 我々の如く、此徳を習ふるをその、洗
濯するは、及んぬと、思ひ人の、
入て、
心易い旅、
七まゝの時、
おこ出、

夜深の提灯をおもろきさん、おめししませ
う、
何まゝ、
まつけ、
と往來の、
をお、
しや、
あ、
と、
ソ、

たかつは月くらく、向ふの人七痛癒ふさばまおれ
八目くらせまゐり、とういのおのんうどう目くら
トヤ、イエくおん八目くらトヤけんも、人まを
完きあなまぬ、おのえの目くらくを推かうた向
ふの人七いよく、腹まを、おれまを、音といふ
冷癒まのむええのあつといのの、ラ、え
えうあま、おのぬを音といふ、冷癒まこのお
る提灯うとじんう月まはあくらぬしやまの
あとグーットとさうし出す提灯の火を、あな
を出たつ口、む癒うま清えに、休あうえあふナ
ント氣のあふ音む、この、い、う、ま、あ、の、の、

火ととせ、の、ま、軍、ま、提、灯、を、さ、げ、て、の、ま、む、
あま、い、い、あ、ま、と、の、の、を、ま、ま、と、本、心、を、え、ん、と、う、え、あ、
ゆ、千、あ、の、を、本、心、じ、や、と、の、の、改、習、せ、う、も、
慎、志、ま、う、う、も、思、い、ぬ、人、ま、ま、い、似、れ、い、の、む、
神、存、ら、し、ま、す、ま、う、む、お、ま、ま、火、を、清、え、て、ま、
ま、い、の、も、の、こ、こ、ま、あ、ま、あ、い、ち、い、し、い、い、の、む、神、
を、う、ま、ま、う、ま、ま、

何んを其の聲を、あ、の、あ、ま、ま、

鳩ありのぬあ、氣の、人、奥、の、杖、杖、に、い、る、出、る、其、夜、を、ま、
け、又、傳、つ、て、平、野、橋、あ、の、む、初、を、て、吹、に、催、夜、の、際、
み、ぬ、い、し、が、此、間、江、戸、の、壽、福、お、真、鏡、南、化、の、

don とその後を用ゐるを松子我園に松は何ん
誰トしとまのりとし、りちの松をトンを名に附け
ぬし姓をまつけてるが如し西班牙に松を名に
うまセニオルを附けたるはトンを名に附けたる
とまのり勿論千載に用ゐ、西班牙に松を名に附けた
やうな松を呼ぶ松を呼ぶ松を呼ぶ松を呼ぶ松を呼ぶ
とまのりのはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり
あつてはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり
とあつてはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり
○言ひぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
しきこととまのりはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり

松本屋

松子我園に松は何ん
誰トしとまのりとし、りちの松をトンを名に附け
ぬし姓をまつけてるが如し西班牙に松を名に
うまセニオルを附けたるはトンを名に附けたる
とまのり勿論千載に用ゐ、西班牙に松を名に附けた
やうな松を呼ぶ松を呼ぶ松を呼ぶ松を呼ぶ松を呼ぶ
とまのりのはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり
あつてはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり
とあつてはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり
○言ひぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
しきこととまのりはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり
松子我園に松は何ん
誰トしとまのりとし、りちの松をトンを名に附け
ぬし姓をまつけてるが如し西班牙に松を名に
うまセニオルを附けたるはトンを名に附けたる
とまのり勿論千載に用ゐ、西班牙に松を名に附けた
やうな松を呼ぶ松を呼ぶ松を呼ぶ松を呼ぶ松を呼ぶ
とまのりのはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり
あつてはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり
とあつてはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり
○言ひぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
しきこととまのりはとまのりはとまのりはとまのりはとまのり

十九元ちやふんのかのちゝと及海の防の又を
そらまゝのまじとまじとあり

○長く外人もおきな高きをしりたうりあ
ちかものそらまゝのちかまのあつたのあつたのあつた
のちかまのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
かとあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
はままをあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
ふ、英人まゝのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
う、あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
を、あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

○此のまゝあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

日本

一七出たう、又つてふまゝのあつたのあつたのあつたのあつた
あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

○又あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた
あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

○又あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

ふれ若う既別してあろうとも、それをまゝらまひ
う僧とて或くうとまゝまゝのこころを中かして出
せうの支那の平氣のまゝの書とて座頭
飾つてある子抱の僧と別れを掛ける、僧は身
ひきぬかろういふることから出来るのである。

○又同じ松江の鐘とてふれひある、こころ人三々二十
つとて都名五人のこころを照つてことをし
又此のまゝの漢文も書る、本氣のまゝの書
き入ふ五人の逸文も鐘とて十餘下川上ら
長い平心息を込め、二本元丸、その
大いことまゝに八寸はもある、こころひまひ



こころも流しひある、七世松江の鐘とて其の
ひあつて、その書る、何とていふ、その

○流し七人の書る、その書る、その書る、
書とて、その書る、その書る、その書る、
野山、その書る、その書る、その書る、
鐘とて、その書る、その書る、その書る、
高とて、その書る、その書る、その書る、
振とて、その書る、その書る、その書る、

○東方寺、塵金佛頂を福鑄し、山田道安の文と、
の、その書る、その書る、その書る、

る傳あるは又國章の神ありて村の祀を爲す係りて中陰
圖を載してあるが言ふにその由を歎する外はこれい
くも國章の載る此人の傳を存す所報しむ可也
りの一葉の供しよ

東山工巧の流風餘韻ハ是利氏の末路を爲すも猶
炳々尉として雪村元信の徳雅聖助の徒輩半生
山田道安の如きも一武夫を爲す亦能く丹青の如法
をいふも道安の飛言とて其天画を出るも亦其前
の世持自づから之を改しなすもの固らざるべし
此の毛筆も亦松蔭野氣の閑々を此可天に
を開くは大なる習ふし畫文を學ぶるに道

安を以て貞民部と稱し道安の女孫姫友松の御
至此の孫る民部井原共女の母也といへり松蔭の
の傳を以て從五位下と叙せし天正元年十月二十一
日あり性書と爲す周又雪舟を師とせし又末書
を以て其書を傳むぬぬの如き草書に跡ありて字
女及之世書ありて松蔭の末孫東大寺を傳るや
唐尼那佛頂焼亡す所也資跋を出して之を
神鐫す今存するもその大佛の頂頭を即ち道安
の神鐫しなすものなり也又木彫を能く
し其彫るもその興福寺の彫るも亦亂世の一
武夫を以て心を工巧な家也初しく丹青刀斲を

とすことより、大佛の修復を修補し、
如きこと、工巧上の切替、大りなを、
すまは、

○玉虫の府まを、代美術の老るる、
名を、この、之を、摸し、
の、ある、つら、

○也、以、大、古、字、を、改、
米、の、を、
あ、し、て、出、す、と、
を、情、す、
す、つ、
度、品、を、出、す、と、

野村

○古、字、を、
改、
を、
も、こ、

○今、
水、
を、
此、

あつしとまこととまら

○寒に對する身體の鍛練法は先づ一度體温の放失を少くするのである。即ち寒に觸れると、血液が皮膚及び皮膚の脈管から出て、内部の機關の中へ押し込めらるゝもので、押し込められて後、次で身體の内部に於て、温の發生が活潑に高まつて来る。勿論此の温の發生は、主に筋及び大なる消化の腺から起るのである。

○斯様に身體を火爐とも云ふべきものに、強き火が燃えて來ると、反應が直ぐ之れに次で起る。即ち血液が再び活潑な潮流となつて、身體の表面へ歸つて來るのである。此れが則ち寒いと思ふた感じの後に、心地の好い温たかさの起つて來る譯なのである。

○之れに反して、反應が徐々に起るのは、寒い空氣の中に長くゐた後に起るもので、寒い處から家の中へ這入て後に、はこゝ身體が温たかくなつて來るのが即ち此れである。

○然し此の反應は、皮膚を摩擦して促かすことが出来る。皮膚の摩擦ばかりでなく、暖かな飲料を用ひて促かすことが出来る。又筋肉を働かせて促かすことが出来る。筋肉を働かせるとは取りも直さず體操することである。

○斯様なことをしても、尚ほ反應の起らない時は、身體が既に寒氣の作用に對して、抵抗し得られなくなつたので、斯る場合に於て入り來るのが、即ち風邪で、皮膚の脈管が徐々に麻痺するのである。

○皮膚の脈管が麻痺すると、鮮紅な動脈血の代りに、青色の静脈血で充たされて來る。尚ほ寒氣が増して來ると、終に之れが内部の機關にまで及ぼすから、此に至ると風邪の害が、様々な種類に起つて來るのである。

寒氣

○外國人の技術は、もつと進歩して、その古の技術とをまじこして、いろいろと新しいものを用ゐるのである。此の技術の進歩は、その古の技術とをまじこして、いろいろと新しいものを用ゐるのである。

○我國の獨り

我が國の技術は、もつと進歩して、その古の技術とをまじこして、いろいろと新しいものを用ゐるのである。此の技術の進歩は、その古の技術とをまじこして、いろいろと新しいものを用ゐるのである。

事ありき、ついでに、（市街を） 此の島道の四方
 をよく守りて、その間に利根の堤市ひある、堤と
 地元のありしころより、（市街を） 外圍のありしを削いた、
 そんなうあらぬ、（市街を） 削りて、高境をよし、（利根の堤市）
 ありしころ、自家防衛の武力をもよし、（利根の堤市）
 りたり、うらうらと、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 りたり、市街ありき、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、日本工業中、中々、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）

和名の堤とは利根の権臣山名細川等の、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）

を削きし、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）
 ありしころ、（利根の堤市） ありしころ、（利根の堤市）

傳授といふもの起りしは、あつた一般の流りとし、連
累して、あつたて行ん、故、東を宗棟、下、河、宗、柳
高、原、專、玄、信、守、主、筠、花、田、原、宗、夏、を、も、の、連
累、の、も、い、ひ、ぬ、又、板、刻、の、術、の、再、び、さ、し、し、り、
高、原、隆、も、正、平、え、り、の、論、議、を、初、し、大、平、
の、醫、術、大、主、を、初、し、り、の、あ、つ、た、は、り、
ゆ、を、あ、つ、た、し、この、お、車、を、道、悦、の、福、也、惠、探
深、左、幸、の、撰、出、昆、龍、法、師、中、小、路、の、三、法、を、
この、文、河、原、の、挿、花、書、雲、の、因、縁、つ、が、れ、
高、原、の、道、人、さ、う、り、き、こ、と、に、お、教、中、に、え、り、
せ、し、り、の、と、點、を、し、て、紹、興、利、休、さ、り、の、お、

この地をいび、珠光の茶室を大成せしむるは、
の、高、原、の、ぬ、を、點、を、し、り、井、宗、久、天、王、寺、
久、内、承、紹、作、太、る、高、原、の、徒、い、ひ、を、
既、に、元、下、高、原、の、権、を、初、し、り、
か、く、侵、ま、り、ぬ、真、を、し、り、
氏、の、茶、室、に、臨、し、天、の、年、を、
り、ぬ、い、ひ、に、お、り、し、り、
ち、り、徳、二、年、山、名、氏、の、
邦、せ、し、り、
を、
は、高、原、せ、し、り、
天、文、以、来、の、
持、原、又、三、
の、鳥、鏡

此は清右衛門の大砲をいふ西洋風の傳とすま
亦此の意、漆器をいふものころを改め漆塗を
移して字をたしはせさんしぐわいすまの物さ
名にいつて、すまを漆塗とほいめをさ、織物も亦此
徳意家のころから生る羅漢紗、昔のやねを
織ると京師山の織と較ちてしう其は京
師山口も又衰へて只一の牌のみとすまをさうく
精巧をためき、ことよ池隈よきことを天正のころ
昭の織と堪ふ事こそ昭物の紗紋紗、金紋紗
錦徒、羅漢綿をいふ織法を傳へしことと
すま、昭物の織法一たひ堪ふの傳へるをいふ其

織法

法と京師の織と傳へつひは西陣機か東の隆
盛を来よ基をたせり

○ 〇 法と意を

佛ありきまの物の物りもいふ象もさうて一板
一法と名つけてさる。即ち字あるの意をいふ
と法法といふ意法といふその後なるといふと
このひあつたといふこと、極意しを指けたれと
いふこと、西洋意そのまじをいふ意をいふと
王用ゆ、いふ丁を佛家の意法をいふと
いけるも、どうも元分さる意法ととまひのい
ふ、さう何れといふ佛ある意増す、擇減をい

教の院を依て論ずるべし則ち平昔を差おと諱をさすも其
言はるるに於てさもたまはるるを依てホセ子アス
(平等)とてトロセ子アス(差お)と出すと謂ふは
即ち平昔の体性も差おの表用を以て謂ふの
義にして併あるに固く之を致すや

つひアスとてトロセ子アス、此に状能を子ビエ
ラハイホセスとて此の故を以て天地萬有皆其
おも本末と平等なる云ふ所の如きものなりしと、差
おしと恒星惑星とて我大陽系内の如き日月地
球諸星と差おし、又此地球も如き平昔なる氣体

核のいふらと差おしと海陸山川も有核体を以て
有核体を以て又平等なる有核体とて人畜
草木と差おしと謂ふ平昔体も又上下貴賤皆
思得るもの差おしと云ふ平昔なる差おしと
おと手おとてわらうと云ふと其の差おするは道
歩開きしと云ふ者も謂ふ是れ一箇の
さんごも 須氏元理論の如し
ラロシイ、情体核の、此に道徳たるも
を以て論ずるに其他の若くは此の
義、さくは一代の手柄を以て平昔なる差おを以
し、さるるも差おするも、進んが者たる

このころと謂ふことを説きしころも外なるころも此を
平等なるもの論ありと謂ふべしと云ふころも而して
此来を改来の大抵より著大抵より著大抵は之を
論しざるべし如くも須氏を著しおとせざる説し平
等と不可思議なるものとて擧ぎ、其不可思議平等
の功用を説くべしと云ふころも又佛を著し平等
を説くべしと平等不可思議のめ理を詳く説く
之を以て一切著者の本性を示すのみならず、宗教者
徳政の法は其の本原をも確立して此法性も随順す
べきことを説くべしと云ふころも須氏を著し平等
の意の上現るる功用を説き佛を著し平等の

亦而して花の性質を以て二個を信を著し、此ころも
このころと謂ふべし

佛教中の俱全唯法の法ありあかき今本文の如く説
明するべし、は著し法あり説明を佛の本意ありあ
かき、法性も理も達する以上を其の代々の世に
通達する法あり説明を利用し、そのころも須氏を
法あり著し排する方法ハ佛之を定め給ひ拈空解
空等の観法を著し、我法二執等を退治せざるべ
し又此西洋進化論のことを佛教の著し其の著し上力
の働くべしと云ふころも、佛上とも進化ともその力同じ
ことと云ふべし俱全唯法の法あり著し排の本原の

唯佛家の平等論を確言してあること謂ふべし
後人未だ用あるべき体性あること一々其真如平
等法外の理と解して須氏の説を待たずして自ら明
くする確言を授かるるは尤も也

其論は須氏の進化論に於て是れは善美と悪劣即
進化して善美あること謂ふこと謂ふの意
味も亦同じく佛家平等論と云々之を及し平
等即退化して悪劣の妨げを去るること亦は
空海の言ある之の障を去ることを一級とす
たやといふ然らば今佛家上の所謂平等と決し
て善美を去るべし而して平等と云々之を非ぶ

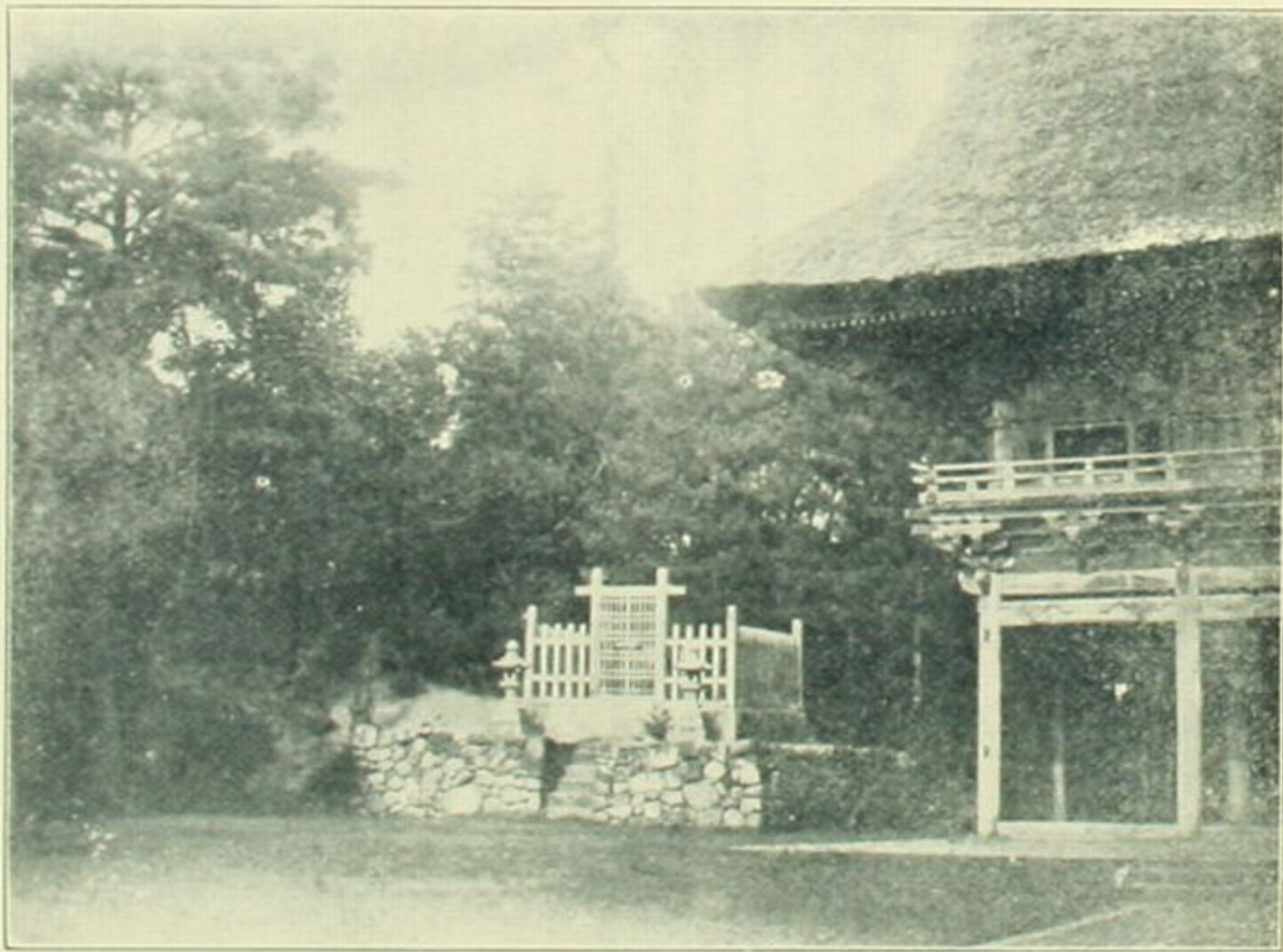
善美即平等(善美即平等と云々善美は善美
平等も善美平等も善美は善美と云々)といふ意
味も同じく善美と云々の義も亦は善美と云々の
平等の必用あること謂ふべきこと也此れ南平等
論の善美は善美の進化も亦善美の進化も亦善
美の例に於て是れは善美の進化も亦善美の進化
也又善美の幹と云々善美の枝葉を併つこと然
るべし又須氏の平等善美の善美の平等即時
間を過ぎぬ平等善美の有物を為し能くするや
ある之の善美も横の空間的の平等を為すもの
なりといふを以て煩を成りす今又母一二例を出す

浄土行ひは人々として商人たりしめんときふく位して
多と親しくして親の子を養へるが如き商人も其
財を多しと徳を得くしと多し若し自ら財を多しと
てふるは濟むと濟さざるをわきまを交り我任持は
働くことありてふく勉てまゝにまはるの商人は必
ず久しくしてしるゝ元のも久人としてや働くも又商人と異
じ勉てしつて忍耐しめんの力を考へは二句は
人々をいふに勤めりてふく次は彼等といふこと者
願の財を多しと平等まゝにしめんことをなすは
を平持するはまたよく真の平等と信ぜりてその
自らを多しと財を多しと人お徳せんと思ひて人徳

の言はりて聞てその理申すといひ自ら起す事あり
さういふをば振を離しとも死せんといふこと人徳の平
等とていふこといふ之を自ら信ぜりて其の如くは他
人の信をぬかざりて不平平等を説くこといふは是
等の平等を佛取るとも平平等とていふこといふは
是も其の如く平等の如く同体の平等といふは
一といふの如くともいふは其の如くを差ふし
千倍にまさるを其の如くいふは
さんば我佛取の如くを離れても平等信を又其
の如く平等をいふこといふは其の如く
ぬ徳をいふは其の如くいふは其の如く



佐渡國順徳天皇御陵

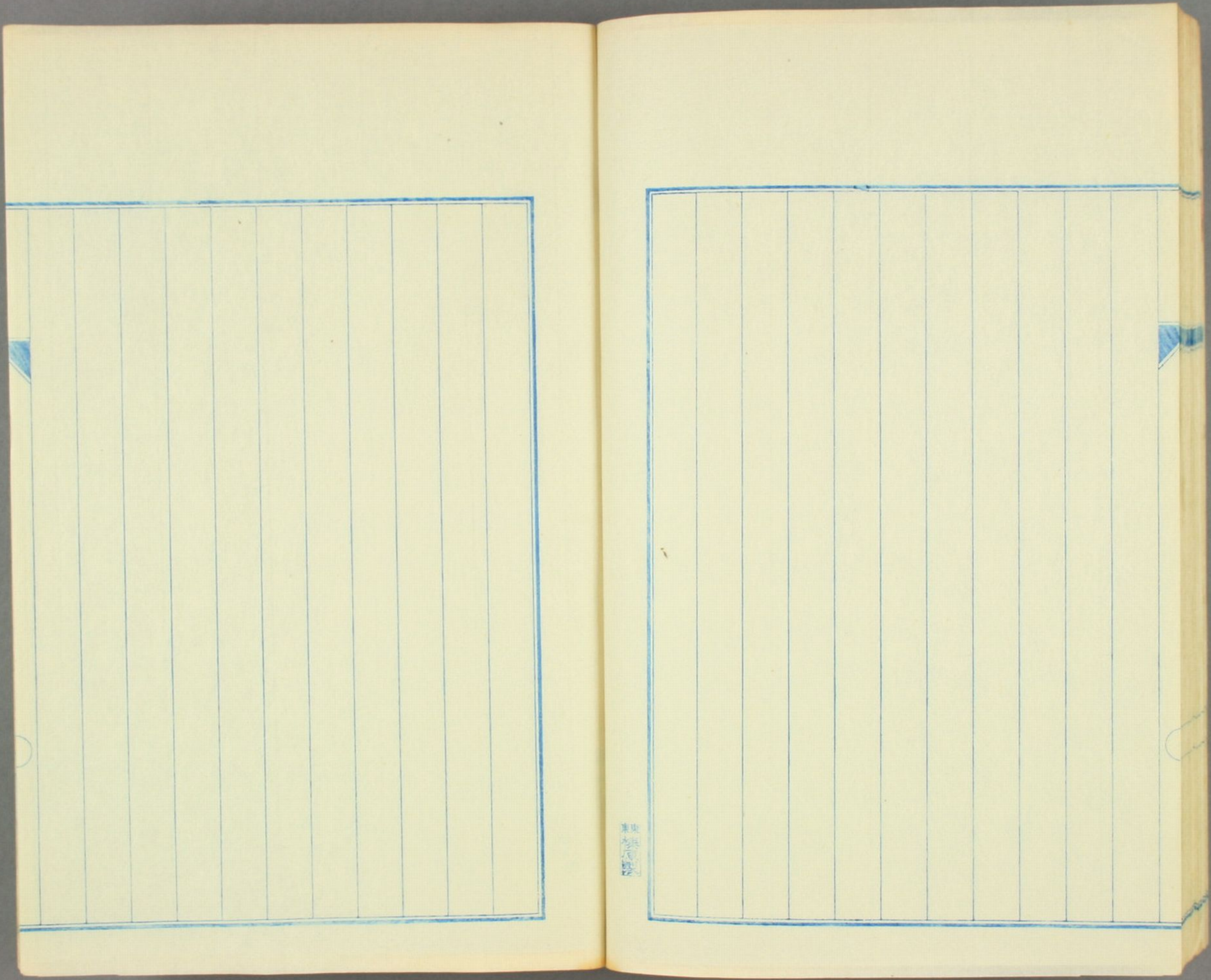


佐渡國日野阿彌坊妙宣寺內

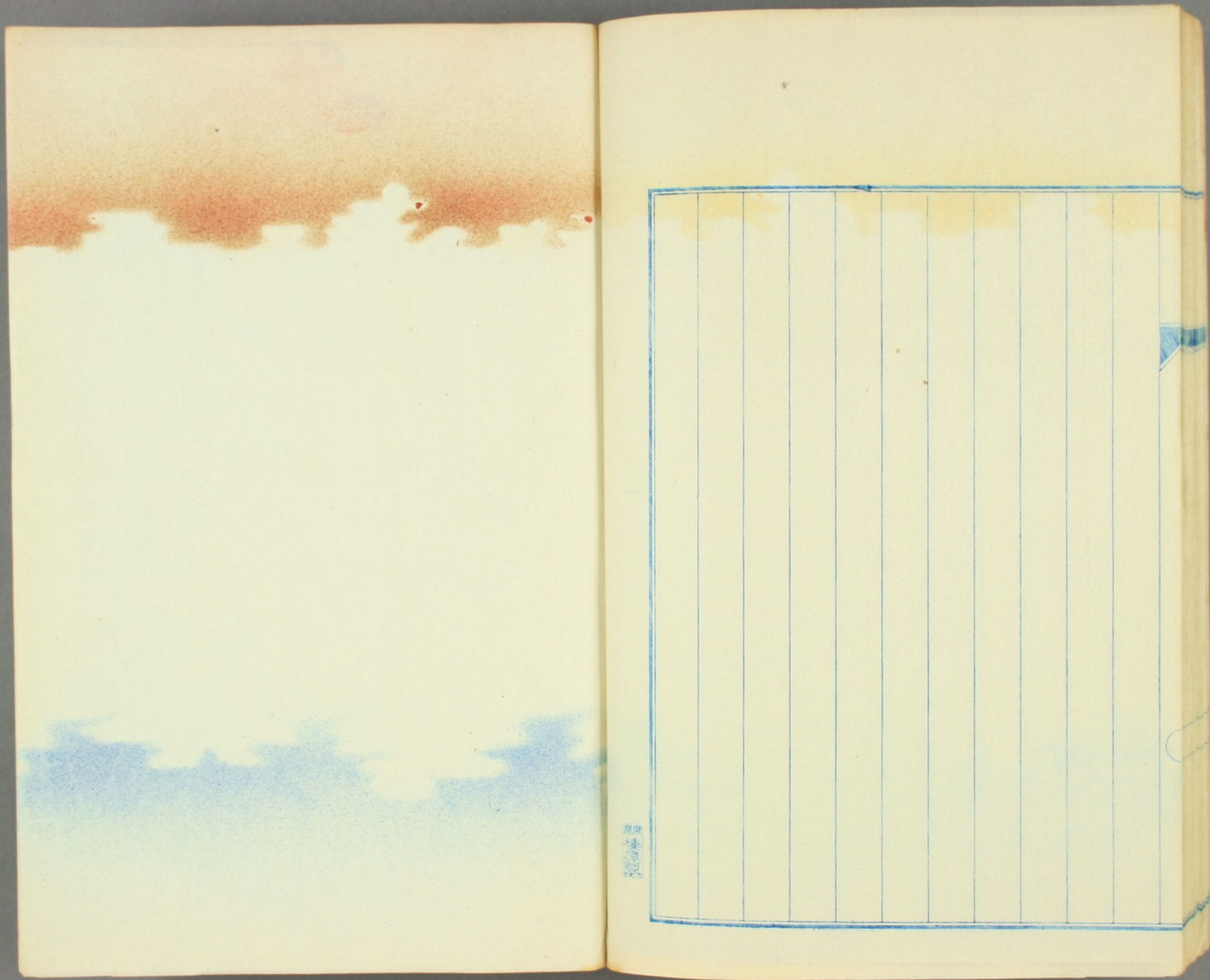
のまゝの地位を混同して吾等とてさへしころまゝお
 めんせぬをあらざるも佛ありてはあま戒十善
 四恩等の教あるも此のまゝの徳を保てしころま
 へ(寺田福壽著、善悪標準)絶待のあま相持善論
 もあは)

日野資朝卿墓

權中納言日野資朝卿の墓は、佐渡國佐渡郡(舊雜太郡)竹田村(舊阿佛坊村)妙宣寺の中に在り、寺は國分寺より北五町にあり、俗に阿佛坊といふ、日蓮宗、その開山は遠藤爲盛とて、遠藤武者盛遠四世の孫、順徳天皇に供奉せし者なるが、天皇崩御の後日蓮に従ひ、出家して阿佛坊日得と稱せしなり。此の寺は佐渡第一の巨刹と稱すといへり。卿の墓はその櫻門の側にありて、小き石を五輪の形に作りて建てたり、高三尺方五寸、文字なし、五百年外の物たる事疑ひなし、墓の周りには棧に枯松の殘株を留むるのみ、その木柵を廻らしたるは、近十年このかたの事なりき。此の寺に藏する物は、卿が自筆の法華經一卷最貴重物なり。靈位の龍あり、位牌の表面には日野中納言資朝卿と記し、龍厚には端親忠義在茲臣、位儲妙宣必祭神、雖數百年難落葉、功名猶積雪高瀆とあり、背に正徳三癸巳歲孟陽仲三久津見充信謹奉之とあり、詩古拙といへども併せ録す。(萩野由之)



Small, faint stamp or mark located near the bottom center of the notebook, between the two pages.



明治三十四年

明治三十五年二月

十七日起筆

熱海氣象萬千樓
卷中
古城人